

2017年3月23日

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
理事長 住野 勇殿

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
2015年度（後期）一般公募「在宅医療研究への助成」
完了報告書

研究テーマ

「重度要介護者を介護する娘介護者における
在宅介護継続を支える認識」

申請者：梅野朱美

所属機関：NPO法人 訪問看護ステーション陽だまり

（佐賀大学大学院医学系研究科修士課程看護学専攻）

共同研究者：藤野成美 佐賀大学医学部看護学科

古野貴臣 佐賀大学医学部看護学科

片桐都茂子 NPO法人 訪問看護ステーション
陽だまり

提出年月日：2017年3月23日

目次

I. 緒言	1
II. 研究目的	3
III. 研究方法	
1. 調査対象	3
2. データ収集方法	3
3. 分析方法	4
4. 信頼性と妥当性の確保	4
5. 用語の定義	4
6. 倫理的配慮	4
IV. 研究結果	
1. 対象者の背景	5
2. 対象者が介護している重度要介護者の背景	5
3. 重度要介護者を介護する娘介護者における在宅介護継続 を支える認識	6
V. 考察	
1. 親への愛着	8
2. 介護状況への満足感	9
3. 親の介護役割に伴う使命感	11
VI. 結論	12
VII. 研究の限界と今後の課題	13
・文献	14
・図表:表一覧(表1・表2・表3)	17

I. 緒言

高齢社会白書(内閣府, 2016)によると, 65 歳以上の高齢者数が全人口の 26.7% となり超高齢社会を迎えた. さらに, 要介護認定を受けている高齢者は 569 万人となり, 介護保険制度が開始されてから 2 倍以上に増加したと報告されている. 国の施策により在院日数の短縮化, 在宅医療が押し進められるなかで, 在宅では医療依存度の高い重度要介護者が増加している(厚生労働省, 2013). 要介護者を支える社会的なシステムが整備されてきているが, 在宅介護の多くは家族に委ねられているのが現状であり(松村ら, 2013), 介護負担軽減をはじめとした在宅介護者に対する介護継続支援のあり方について, 医療依存度の高い重度要介護者を介護する在宅介護者をどのようにサポートするかが課題となっている(厚生労働省, 2013).

在宅介護者において, 超高齢化と家族形態の変化に伴い, 主介護者が嫁・妻から娘・息子に移行していると松村ら(2013)は報告している. 国民生活基礎調査(厚生労働省, 2013)では, 別居介護を含めると配偶者を抜いて子供による介護が最多になったことが報告されている. 在宅介護者の続柄においては娘が最も多いと報告されている(梶原ら, 2012. 松村ら, 2013. 彦ら, 2014). また, 高齢者の意識調査(内閣府, 2014)では, 介護を受けたい場所において「自宅で介護をしてほしい」と希望する人が 4 割と最も多く, なかでも「娘に介護をしてもらいたい」と希望する人が増加していることが報告されている(厚生労働省, 2013). さらに, 高齢社会白書(内閣府, 2016)によると, 家族の介護や看護を理由とした離職・転職者は, 女性介護者が全体の 80.3% を占めていることが報告されている. このような背景から, 女性介護者の中でも中心的担い手として期待の高まっている娘介護者への支援策を検討する必要があると考える.

在宅介護の現状に関する先行研究において, これまでの否定的な側面では介護負担感に着目した介護負担感尺度の研究(Zarit, 1980)を始めとする介護者の介護負担感に焦点をおいた数多くの研究(安田ら, 2001. 荒井ら, 2003. 大嶋ら, 2004. 仲井, 2013)がなされている. 肯定的な側面では肯定的評価に着目した研究(Lawton, 1989)を始めとする肯定的認識に焦点をおいた報告(山本ら, 2002. 陶山ら, 2004. 藤野ら, 2007)が数多くなされてきた. このように, 介護者の否定的・肯定的側面に着目し, 介護者への介護支援に対する検討がなされてきた. また, 介護者が介護継続に至るための在宅介護者への支援についての報告(佐藤ら, 2005. 高橋^順ら, 岡部ら, 2013)が数多く存在する. 在宅介護継続に関する先行研究においては, 介護生活継続のための評価尺度に着目した研究(堀口ら, 2013), 認知症高齢者を介護する家族の介護継続意向に関する研究(梶原ら, 2007),

介護者の介護継続要因に関する研究(國友ら, 2008. 長澤ら, 2008. 久保川ら, 2010)などがある。また, 介護継続に至るためには介護者の介護継続意思が大きく関連していることが報告されている(梶原ら, 2007. 高橋^甲ら, 2006). 高橋^順ら(2013)は介護継続意思を介護者が被介護者の介護を一日でも長く続けたい思いと定義し, 自分しかいない, 家でみていくという強い意思である思いが介護継続意思となり, 介護継続に至ることを報告している。以上の先行研究から, 在宅介護継続には介護者の介護継続に関連した意思が大きく影響していることが明らかになっている。

一方, 重度要介護者は, 年々増加傾向であり, 要介護者全体の 22.4%を占めている(内閣府, 2016)。要介護者の介護サービスの利用実態をみると, 要介護者(要介護 1~3)は在宅サービスの利用が多く, 重度要介護者(要介護 4・5)の約半数は介護老人保健施設や特別養護老人ホームといった施設を利用している(内閣府, 2016)。さらに重度要介護者に関する先行研究において, 菊池ら(2010)は高齢者の排泄などの介護負担が大きく, 施設入所の割合が高いこと, 樋口ら(2007)は医療処置を担う家族介護者の体験から, 処置に対する緊張と疲労や介護者としての責任と誇りがあること, 片山ら(2015)は医療や介護への未知の不安, 介護への葛藤の認識を報告している。このような背景から, 重度要介護者を介護する在宅介護者が介護継続困難な状況の中で, 重度要介護者の在宅介護を担っている現状(樋口ら, 2007. 菊池ら, 2010. 片山ら, 2015)が明らかとなっている。よって, 重度要介護者を介護する在宅介護者への介護継続のための支援策を検討する必要があるといえる。さらに, 横瀬(2009)が報告している在宅介護者の中でも多様な役割を担い, 介護への期待が高まっている娘介護者への支援策を検討することが重要といえる。以上のことから, 重度要介護者を介護する娘介護者の在宅介護継続を支える認識を明らかにする必要があると考えた。在宅介護者の中心的担い手となっている娘介護者が重度要介護者である親の介護を継続していく上で, 先行研究によって明らかにされている介護に対する肯定的・否定的とする両義的な認識のみならず, 被介護者・家族・地域などの関係性から派生する多様な認識(岡部ら, 2013)が存在するのではないかと考えた。しかしながら, 娘介護者が, 在宅において重度要介護者を介護する上で, どのような認識を持ちながら, 介護を継続しているのか, 明らかにした研究報告は見当たらない。そこで, 介護継続意思である介護を一日でも長く続けたい思いだけではなく(高橋^順ら, 2013), 介護者が介護を続ける上で支えとなっている思いや考え(岡部ら, 2013)と定義している在宅介護継続を支える認識について検討する必要があると考えた。

よって、本研究は重度要介護者を介護する娘介護者における在宅介護継続を支える認識を明らかにすることを目的とし、在宅介護継続への支援のあり方について示唆を得ることとした。

II. 研究目的

本研究の目的は、重度要介護者を介護する娘介護者の在宅介護継続を支える認識を明らかにすることである。

III. 研究方法

本研究のデザインは半構成的面接調査による質的データを基にした質的記述的研究である。

1. 調査対象

S 県内で訪問看護ステーションを利用し、重度要介護者(要介護 4・5)の在宅における主介護者である実娘介護者(以下、娘介護者と記す)を対象とした。対象選定は訪問看護ステーション施設長からの紹介で、本研究の趣旨を理解し同意が得られた娘介護者とした。

2. データ収集方法

S 県内の 58 施設の訪問看護ステーションの施設長に対して本研究の趣旨を説明し、11 施設の訪問看護ステーションの施設長の同意と協力を得た。施設長から、対象者へ研究協力依頼の連絡後、同意の得られた対象者を確認し、研究者が対象者へ連絡をとる手順を踏んだ。推薦された娘介護者に対して、まず電話で研究の概要を説明し、調査協力の意思を確認できた対象者に対してインタビュー調査の日時を調整した。その後、対象者の自宅へ担当の訪問看護師と同行または、研究者が 1 人で訪問し、口頭にて研究内容の説明を行い、文書にて同意を得た後に 40～60 分程度のインタビュー調査を実施した。作成したインタビュー項目に基づき、娘であるご自分が親の介護を続けていく上で支えとなっている思いや考えは、どのようなことかという内容を中心に自由に語ってもらった。面接の終了は、研究対象者の言動を観察し、面接者がこれ以上語ることがないと判断した時点とした。インタビュー内容は、対象者の同意を得て IC レコーダーに録音した。また、インタビュー調査の前に、対象者の背景として年齢、介護期間、訪問看護利用期間、副介護者の有無、重度要介護者との同居の有無、就労状況、ソーシャルサ

ポートの利用状況などの項目について、対象者が介護する重度要介護者の背景として年齢、性別、主要疾患、要介護度、医療処置の項目、ADL 状況(バーセルインデックス)などの項目について、聞き取り調査を実施した。調査期間は 2016 年 2 月～2016 年 4 月であった。

3. 分析方法

分析は、対象者から得られた生の語りを抽象化して記述する質的記述的方法（グレッグ, 2007）を用いた。インタビュー内容は IC レコーダーによる録音を文章化した逐語録を作成し、質的帰納的に分析した。逐語録から対象者の語りをデータとし、在宅介護継続を支える認識に関係していると思われる文脈をデータから抽出し、コードを作成した。類似した内容のコードを 1 つのまとまりに集約し、サブカテゴリとした。そして、サブカテゴリの抽象度を上げてカテゴリとした。さらにカテゴリの共通性を見出し、コアカテゴリを命名した。カテゴリの構成ではデータ、コード、サブカテゴリに戻りながら、慎重に抽象度を高めていった。

4. 信頼性と妥当性の確保

本研究では、インタビュー技術向上のために調査実施前に、プレインタビューを実施し、インタビュー項目の内容についても確認を行った。分析過程では在宅看護学分野での学識者や看護学修士号をもつ訪問看護ステーション施設長とのスーパーバイズを意見が一致するまで実施した。分析においては、判断に迷う曖昧な表現がはいつていないことや、他の項目と意味内容が重複していないことなどを、十分に検討し、分析結果の信頼性と妥当性に配慮した。

5. 用語の定義

- 1) **重度要介護者**: 第 2 号被保険者を含む、要介護 4・5 の認定を受けている被介護者とし、認知症が主要疾患である被介護者や癌終末期などの余命を宣告されている被介護者を除く対象者とした。
- 2) **在宅介護継続を支える認識**: 岡部ら (2013) の定義を参考にし、介護者が在宅で親の介護を続けていく上で支えとなっている思いや考えと定義した。

6. 倫理的配慮

訪問看護ステーションの施設長に対し本研究の趣旨を説明し、同意と協力を得た。施設長に対象者の選定と対象者への連絡を依頼し、施設長の依頼から同意の得られた対

対象者を確認後、研究担当者が対象者へ連絡をとる手順を踏んだ。次に、対象者については研究者が訪問時に、本研究の目的・意義、研究期間、倫理的配慮について記載された文書に基づき説明し、対象者の研究への協力は自由意志であり、研究への参加・不参加により、今後のサービス内容に不利益を受けることがないこと、研究で知り得た情報は本研究以外の目的に流用しないことを口頭で説明した。そして、同意を得られた対象者に対し研究への協力についての同意書に署名と承諾を得た。また、調査実施にあたり、対象者の体調・気分・都合を最優先にして実施日を設定した。研究担当者の連絡先、連絡方法を明記し、いつでも質問に応じる体制を準備した。また、インタビュー調査の際、プライバシー・匿名性を確保し、データは連結可能性匿名化とし、パスワードでロックができる外部記憶装置に保存したうえで、施錠できる棚に保管することで研究者が責任をもって情報管理を行った。

本研究は、佐賀大学医学部倫理委員会の承認(27-55)後に実施した。

IV. 研究結果

1. 対象者の背景 (表 1 参照)

S 県内の 58 施設中、11 施設から研究協力の承諾を得ることができ、12 名の対象者に対してインタビューを行った。対象者への平均面接時間は 44.9 ± 7.8 分(35~57 分)であった。

対象者は 40~60 歳代の娘介護者で平均年齢は 60.3 ± 6.1 歳(45~67 歳)、娘介護者の平均介護期間は 6.9 ± 3.2 年(3~12 年)、副介護者が有は 3 名(続柄:母親)、重度要介護者との同居は 11 名、別居介護が 1 名であった。就労状況は正規雇用 1 名、自営業 3 名、パートタイム雇用 2 名であった。

2. 対象者が介護している重度要介護者の背景 (表 2 参照)

重度要介護者の平均年齢は 87.8 ± 5.4 歳(74~94 歳)であった。続柄は母親 7 名、父親 5 名、要介護 4 が 6 名、要介護 5 が 6 名であった。バーセルインデックス(基本的生活動作:100 点満点で点数が低いほど介助を要する。20 点以下では全介助となる)は平均 10 ± 11.1 点(0~25 点)であった。主要疾患は筋委縮性側索硬化症 1 名、パーキンソン病 1 名、廃用症候群 3 名、脳血管系障害 5 名、心疾患系障害 2 名であった。必要な医療的処置は、人工呼吸器管理、吸引、リハビリテーションなど多岐に渡っていた。在宅サービス利用については訪問看護以外のデイサービス、ショートステイ、訪問介護などを利用していった。

3. 重度要介護者を介護する娘介護者における在宅介護継続を支える認識(表3参照)

対象者が語った在宅介護継続を支える認識に関する内容を表している発言内容について544のデータを抽出した。そのデータから、意味のあるまとまりで区切り、それぞれのまとまりの部分 요약したものを抽出し、70のコードを見出した。類似した内容のコードを1つのまとまりに集約し、27のサブカテゴリとした。さらに、サブカテゴリの抽象度を上げて11のカテゴリを抽出した。そのカテゴリから共通性を見出し、3つのコアカテゴリを命名した。

以下、コアカテゴリは『 』, カテゴリ【 】, サブカテゴリ《 》, コード「 」を用いて示す。

重度要介護者を介護する娘介護者における在宅介護継続を支える認識として『親への愛着』『介護状況への満足感』『親の介護役割に伴う使命感』の3つのコアカテゴリが明らかになった。

1) 親への愛着

コアカテゴリである『親への愛着』は、【親への愛情】【親への感謝】【家族の絆】【親の介護をやり遂げたい看取りへの思い】の4のカテゴリ、9のサブカテゴリで構成された。

娘介護者は「親のことが大好きで、その親の子どもで良かった」と思う《親への好意的感情》や「親は特別で大切だ」と思う《親を大切に思う気持ち》として【親への愛情】を認識していた。また、「親がいて私がいる、親のおかげだと思う」気持ちや「居てくれるだけで親の存在があり、親としての役割がある」と思う《親としての存在や役割への有り難さ》に感謝し、子として「親に育ててもらった恩義がある」ことや「今までお世話になったことを恩返ししていく思い」である《親への恩返し》からなる【親への感謝】を認識していた。また、「親の介護を通して親を中心とした人との繋がりがある」と思う《親を中心とした一体感》や「娘家族と暮らすことが一番うまくいくと思う考え」と「“あうん”の呼吸で介護ができる、これは嫁でも息子でも出来ない娘だから出来ると思う」ことから《娘の介護が一番と思う考え》を認識していた。「親がいてくれることで私が安心して安定している」ことや「私が介護することで親の状態が安定している」ことで《親と過ごす安心感》から【家族の絆】を認識していた。さらに、「“自分は家で死にたい”という親の意思を尊重している」ことや「住み慣れた家で生を全うすることが一番良いことだ」と思う《親の意思を尊重する看取りへの思い》が、「親がこれ以上は元気にならない、でも、そこを維持したいと思

う」思いを持ちながら、「父の最期に納得がいかなかったから、母は最後まで後悔のないように、私が介護をやり遂げたい」と思う《娘としての後悔のない看取りへの思い》からなる、【親の介護をやり遂げたい看取りへの思い】を認識していた。

2) 介護状況への満足感

コアカテゴリである『介護状況への満足感』は、【他者からの承認に対する喜び】【社会的支援による安心感】【親の介護を通して得られる充実感】【親の介護は自らの生きる支え】の4のカテゴリ、10のサブカテゴリで構成された。

娘介護者は親の介護の経験から「親の優しい言葉やありがとうの言葉に喜びを感じる」ことや、「委ねられて必要とされることに喜びを感じる」ことである《親に承認される事での喜び》や「近所の人からの労いの言葉や、訪問看護師さんから褒めてもらったこと、頑張っている自分を認めてもらえたことがとてもうれしかった」と思う《社会からの承認に対する喜び》である【他者からの承認に対する喜び】を認識していた。また、「訪問看護師さんが24時間体制でいつでも来てくれることが一番安心である」と思う《訪問看護支援による安心感》や「何か困りごとがあった時にケアマネさんの提案がとても助かり安心できる、レスパイト入院やデイサービス・ショートステイはとても助かり安心できる」という《介護サービスによる安心感》である【社会的支援による安心感】を認識していた。また、「親の喜ぶ顔や笑顔を見ると介護を頑張ってきて良かった」と思う《親の介護から得られる喜び》や「共に笑うことや返事が返ってくる楽しみがある」と思う《親の介護から得られる楽しみ》を持ち、「介護と仕事のバランスを考えて自分らしくいたいと思う」考えや「仕事があることで頭の切り替えや生活にメリハリができ、親の介護を頑張れる」という考えである《介護と仕事を続けていく上での励み》からなる、【親の介護を通して得られる充実感】を認識していた。

娘介護者にとって、「親の介護をすることで自分の生きる意味がある」こと「自分が救われて助けられている」と思う《親の介護は自らの生きる意味》を認識したことや、「親の介護が生きていくうえでの人生の支えとなっている」思いと「親の介護が生きがいとなっている」という《親の介護は自らの生きがい》を認識していた。また、「病気になったにしても親には回復してほしいという希望がある」ことや「親に対して期待をしている娘がいて、いつまでも居て欲しい親は私の希望だ」と思う《親の存在は生きる希望》からなる【親の介護は自らの生きる支え】を認識していた。

3) 親の介護役割に伴う使命感

コアカテゴリである『親の介護役割に伴う使命感』は、【親の介護による拘束感】
【親の介護のありのままを受容せざるを得ない考え】 【娘としての介護役割の自覚】
の3のカテゴリ, 8のサブカテゴリで構成された。

娘介護者は「自分しかない」という《親の介護をせざるを得ないという考え》を持ちながら、「“娘に看て貰って一番良かね”と言われて、娘の介護が一番良いという世間の目がある」という《世間体を守る考え》を認識していた。また、「親を預けることにいつもかわいそうだと思う」ことや「親が行きたがらないのに、自分が楽しんでいるようで、預けることを不憫だと思う」ことが《社会資源を利用することへの罪悪感》を併せ持っており【親の介護による拘束感】を認識していた。また、親の介護の経験から、「親のありのままを受け入れようと思う」ことで《親の介護を受け入れざるを得ない思い》を持ちながら、「今を受け入れて楽に生きる考えが出来れば良いと思う」ことや「“大変なことを乗り越えてきたんだから何とかなるさ”と思う考えが出来たら良いと思う」《現状を受け入れる考え》である【親の介護のありのままを受容せざるを得ない考え】を認識していた。

娘介護者は《親の介護はあたり前》と認識し、「母が祖母を長い間、家で看ていたことから、自分も看ようと思った」と《親の介護への決意》を持ち、「親の介護は私の責任だと思う」として、《私しかない親の介護への責務》が【娘としての介護役割の自覚】となり、在宅介護継続を支える認識となっていた。

V. 考察

重度要介護者を介護する娘介護者における在宅介護継続を支える認識について、コアカテゴリごとに考察する。

1. 親への愛着

『親への愛着』として、娘介護者が抱いた【親への愛情】が在宅介護継続を支える認識として明らかになった。大嶋ら(2004)は介護者と被介護者の関係性が介護者の感情・情緒に影響することを報告している。長澤ら(2008)や岡部ら(2013)は被介護者との関係性の中で育まれる愛情が、介護継続を支える感情・情緒として重要であることを報告している。本研究においても、娘介護者が《親への好意的感情》や《親を大切に思う気持ち》である親と子の情緒的繋がりを抱いたことが在宅介護継続を支える認識であるという同様の結果が得られた。

次に、娘介護者にとって《親としての存在や役割への有り難さ》や《親への恩返

し》である【親への感謝】が在宅介護継続を支える認識として明らかになった。娘として「今までお世話になったことを恩返ししていく」という思いを持ったことで【親への感謝】を認識したと考える。高橋^順ら(2013)や岡部ら(2013)は介護者による被介護者への介護は、お世話になった恩返しや感謝として位置づけられていると報告しており、本研究においても同様の結果であった。

長澤ら(2008)は介護を通して、介護者が家族間の絆を認識したことが、介護継続の要因であることを報告している。本研究においては、「“あうん”の呼吸で介護ができる、これは嫁でも息子でも出来ない娘だから出来る」として、《娘の介護が一番と思う考え》による【家族の絆】が在宅介護継続を支える認識として示されたと考える。また、《親を中心とした一体感》や《親と過ごす安心感》から【家族の絆】を感じたことが在宅介護継続を支える認識となったと考える。山本ら(2002)は愛着について、介護者が被介護者に対して持つ情緒的な繋がりは、介護を継続するための強い動機づけになると報告している。本研究においても娘介護者は『親への愛着』があるからこそ「親がこれ以上は元気にならない、でも、そこを維持したい」や「住み慣れた家で親の最期を全うすることを手助けしたいと思う」といった【親の介護をやり遂げたい看取りへの思い】を認識していたのではないかと考える。一方、天谷ら(2002)は、この親子関係の繋がりの強さが娘介護者と親との情緒的絆の危機的状況にも繋がることを報告している。よって、重度要介護者である親と介護者である娘の関係性を注意深く観察し、娘介護者の介護に対する思いや考えに配慮した支援の重要性が示唆された。

2. 介護状況への満足感

心理学者である Maslow (1970)は人間の基本的欲求として、欲求5段階説理論である生理的欲求・安全欲求・所属欲求・承認欲求・自己実現欲求を提唱している。本研究において、娘介護者の《親に承認されることでの喜び》といった【他者からの承認に対する喜び】は承認欲求に該当すると考え、娘介護者の“介護を継続したい”という自己実現の欲求を満たすための基礎となる認識となったと考える。高橋^甲ら(2006)は被介護者からの謝意を受けることによってやりがいを感じると報告し、岡部ら(2013)は医療従事者からの評価が喜びや励みになることを報告している。本研究においても、娘介護者は「親に必要とされることに喜びを感じる」、社会に対して「これだけ頑張っている自分を認めて貰えたことがとてもうれしかった」という【他者からの承認に対する喜び】を認識したことは、同様の結果であった。

また、坪井ら(2011)は、在宅介護継続には、介護保険サービスや訪問看護利用が負担感軽減に重要であることを報告している。本研究においても、娘介護者が《訪問看護支

援による安心感》や《介護サービスによる安心感》から【社会的支援による安心感】を認識し在宅介護継続を支えていたと考える。以上のことから、介護者が必要としている社会的支援を明らかにするための専門職・関係機関との連携・調整の重要性が示唆された。

久保川ら(2010)は介護継続のためには経済的な基盤を確保することが前提であり、介護者の労働が維持できるような配慮の重要性を報告している。本研究の対象者である娘介護者は「介護と仕事のバランスを考えて自分らしくいたい」と仕事と介護の両立を実践していた。また「仕事が生計のメリハリとなり頑張れる」と語り、仕事を継続することに意義や価値を見出し《介護と仕事を続けていく上での励み》と認識し、介護への原動力に変えていた。今後さらなる増加が予測され、支援の必要性がある娘介護者が介護と仕事を両立し、経済的基盤を確保するためには、橋本ら(2008)が述べているように介護者のニーズを踏まえたフォーマルサポートのマッチングやインフォーマルサポートによる柔軟な支援体制の構築が重要であると考えられる。インフォーマルサポートにおいては、家族の協力や労いの言葉、近隣の人々の介護に対する理解や言葉かけが励みとなるような、介護者を孤立させないためのボランティアを含めた社会のネットワーク作りの支援体制(橋本, 2008)が重要であり、サポート体制には極め細やかなアセスメントが必要とされることが考えられる。

坂井ら(2014)は介護者が介護経験から得られる意義や価値の獲得を、自らの人生の意味づけとして捉えることの重要性を報告している。介護の意味づけが介護を継続する上で重要であることを、多くの先行研究(彦ら, 2014. 宮坂ら, 2014. 荒川ら, 2012)で明らかにされている。本研究においても、娘介護者は《親の介護は自らの生きる意味》と介護への意義を見出し、介護の意味を認識していた。娘介護者にとって《親の介護は自らの生きがい》であり、《親の存在は生きる希望》という思いが【親の介護は自らの生きる支え】と介護に対する意義や価値を認識していたと考える。

藤野ら(2007)は介護の経験から得られる喜びや学びである満足感が人間的成長や介護者の心身の健康に影響し、介護継続に関連していることを報告している。本研究において、娘介護者は《親の介護から得られる喜び》や《親の介護から得られる楽しみ》を認識し、多様な役割を担いながらも、「仕事があることで頭の切り替えや生活にメリハリができ、親の介護を頑張れる」といった、《介護と仕事を続けていく上での励み》から【親の介護を通して得られる充実感】を認識していることが明らかとなった。これは、娘介護者が親の介護から得られた喜びや楽しみ、励みから【親の介護を通して得

られる充実感】を認識したことで、『介護状況への満足感』が得られ、在宅介護継続を支える認識となっていたと考える。よって、【他者からの承認に対する喜び】や【社会的支援による安心感】から【親の介護は自らの生きる支え】と介護に対する意義や価値を認識した【親の介護を通して得られる充実感】からなる『介護状況への満足感』への思いや考えが在宅介護継続を支える認識として重要と考えられた。これらから、娘介護者には、親の介護に対する承認への労いの言葉かけや介護に対する思いや考えに配慮することで、『介護状況への満足感』を得られるような娘介護者のニーズに寄り添った柔軟なサポート体制を整えていくことが重要であることが示唆された。

3. 親の介護役割に伴う使命感

娘介護者は親である重度要介護者の在宅介護を継続するうえで【親の介護による拘束感】を認識していたことが明らかになった。天谷ら(2002)は要介護者が希望しない施設利用に踏み切るときの娘介護者の後ろめたさや罪悪感があることを報告している。本研究においても、娘介護者は「親を預けることにいつもかわいそうだと思う」思いから《社会資源を利用することへの罪悪感》を認識していたことが明らかとなった。娘介護者は、この罪悪感から、「自分が楽しんでいるようで預けることを不憫に思う」やむを得ない認識により介護を継続している可能性があると考えられる。また、高橋^順ら(2013)は介護者の介護継続意思を支えていたものは代替の利かない介護者の強い使命感であったと報告している。坂井ら(2014)も、家族介護者において、介護者の務めとしての使命感を持ち、介護を継続していたことを報告している。高橋^甲ら(2006)は介護者の介護継続意思を妨げる要素として、時間的・身体的・精神的拘束感を報告している。本研究において《娘の介護が一番いいという世間の目がある》ことや《世間体を守る考え》は、娘介護者として親の介護に対する社会的規範による精神的拘束感を認識していることが明らかとなった。本研究における娘介護者は、【親の介護による拘束感】や【親の介護のありのままを受容せざるを得ない考え】を持ちながらも、《私しかいない親の介護への責務》と【娘としての介護役割の自覚】である、娘介護者特有の『親の介護役割に伴う使命感』を認識していたことが、重度要介護者を介護する娘介護者の在宅介護継続を支える認識として明らかになった。よって、娘介護者には介護を継続しなければならない現実と折り合いをつけながら介護役割を担っている労を労い、使命感によって無理をして介護負担を募らせないようにサポートすることが重要であることが示唆された。

VI. 結論

重度要介護者を介護する娘介護者における在宅介護継続を支える認識において『親への愛着』『介護状況への満足感』『親の介護役割に伴う使命感』の3つのコアカテゴリーが見出された。

1. 【親への感謝】【親への愛情】【家族の絆】【親の介護をやり遂げたい看取りへの思い】からなる『親への愛着』が在宅介護継続を支える認識として明らかになった。

重度要介護者である親と介護者である娘の関係性を注意深く観察し、娘介護者の介護に対する思いや考えに配慮した支援の重要性が示唆された。

2. 【他者からの承認に対する喜び】【社会的支援による安心感】【親の介護を通して得られる充実感】【親の介護は自らの生きる支え】からなる『介護状況への満足感』が在宅介護継続を支える認識として明らかになった。

介護者のニーズを踏まえたフォーマルサポートのマッチングやインフォーマルサポートによる柔軟な支援体制が重要であることが示唆された。

3. 【親の介護による拘束感】【親の介護のありのままを受容せざるを得ない考え】

【娘としての介護役割の自覚】からなる『親の介護役割に伴う使命感』が在宅介護継続を支える認識として明らかになった。

介護を継続しなければならない現実と折り合いをつけながら介護役割を担っている娘介護者の労を労い、娘介護者が認識する使命感によって無理をして介護負担を募らせないようにサポートすることが重要であることが示唆された。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、重度要介護者を介護する娘介護者の在宅介護継続を支える認識を明らかにしたものの、在宅介護継続のための支援体制の構築のためには、更なる検討が必要である。今後、対象者数を増やし、地域性を考慮した上で、より詳細な分析を行う必要があると考える。

しかしながら、本研究において、今後益々増加傾向である重度要介護者を介護する娘介護者の在宅介護継続を支える認識を明らかにできたことは意義があると考え

謝辞

本研究にあたり、ご協力を賜りました娘介護者の皆様ならびに S 県訪問看護ステーションの皆様には厚くお礼申し上げます。

本研究は公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による研究である。

文献

- 内閣府(2016):高齢社会白書(全体版),<http://www8.cao.go.jp/pourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/index.html>
- 厚生労働省(2013):在宅医療(その2), 29, Mar
http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000032e8y-att/2r98520000032ee0_1.pdf
- 松村香, 岡田節子, 山内朝江, 与那覇五重(2013):主介護者の抑うつ状態に影響を与える要因の構造的分析, 老年精神医学雑誌, 24, 1295-1307
- 厚生労働省(2013):国民生活基礎調査, 政府統計一覧-家族, 親族の介護の状況(第42表~第6表), <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001031016>
- 梶原弘平, 小野ミツ(2012):認知症高齢者の在宅介護者が抱く介護の肯定的な認識と特性に関する研究, 日本認知症ケア学会誌, 11(2), 487-495
- 内閣府(2014):高齢社会白書(全体版), 3 高齢者の健康-福祉,
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/26pdf_index.html
- Zarit SH, Reever KE, Bach-Peterson J(1980):Relatives of the impaired elderly:Correlates of feelings of burden. *Gerontologist* ,20, 649-655
- 安田肇, 近藤和泉, 佐藤能啓(2001):わが国における高齢障害者を介護する家族の介護負担に関する研究-介護者の介護負担感・主観的幸福感とコーピングの関連を中心に, *リハビリテーション医学*, 38(6), 481-489
- 荒井由美子, 田宮菜奈子, 矢野 栄二(2003):Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版(J-ZBI_8)の作成-その信頼性と妥当性に関する検討, *日老医誌*, 40, 497-503
- 大嶋伸雄, 星山佳治, 川口毅(2004):介護以前の主観的人間関係からみた介護負担感に関する疫学的研究, *昭和医会誌*, 64(2), 215-228
- 仲井達哉(2013):パーキンソン病患者の家族介護者における介護負担感に関する要因の文献的検討, *日本在宅ケア学会誌*, 17(1), 33-40
- Lawton MP, Kleban MH, Moss M, Rovine M, Glicksman A(1989):Measuring Caregiving Appraisal *Journal of Gerontology Psychological Sciences* ,44(3), 61-71
- 山本則子, 石垣和子, 国吉緑, 河原宣子, 長谷川喜代美, 林邦彦, 杉下知子(2002):高齢者の家族における介護の肯定的認識と生活の質(QOL, 生きがい感および介護継続意思との関連, 続柄別の検討, *日本公衆衛生学会誌*, 49(7), 660-671
- 陶山啓子, 河野理恵, 河野保子(2004):家族介護者の介護肯定感の形成に関する要因分析, *老年社会科学*, 25(4), 461-470
- 藤野成美, 岡村仁(2007):精神障害者の家族介護者における介護の肯定的認識とその関連要因, *臨床精神医学*, 36, 781-788
- 佐藤敏子, 清水裕子(2005):女性介護者の蓄積的疲労徴候の実態と介護継続関連要因

- 嫁・妻・娘の検討, 日本在宅ケア学会誌, 9(1), 46-51
- 高橋順子, 眞鍋知子(2013): 認知症高齢者を介護する配偶者の介護継続意思を支える要因—
配偶者特有の認識, 看護総合科学研究会誌, 15(1), Sep, 389
- 岡部日香莉, 高岡佳代, 小山萌, 及川真子, 平野美千代(2013): 地方沿岸部における家族
介護者の在宅介護継続を支える認識, 北海道公衆衛生学会誌, 27(2), 61-68
- 堀口和子, 岩田昇, 松田宣子(2013): 家族ユニットにおける介護生活評価指標の開発,
老年社会科学, 35(1), 15-28
- 梶原弘平, 横山正博(2007): 認知症高齢者を介護する家族の介護継続意向の要因に関する
研究, 日本認知症ケア学会誌, 6(1), 38-46
- 國友香奈, 佐古委句子, 玉置千恵子, 中山博美, 宮田有香, 山本紗栄, 池添志乃(2008):
男性介護者の在宅介護継続の基盤となる価値観, 家族看護, 6(1), 117-126
- 長澤久美子, 飯田澄美子(2008): 男性介護者の介護継続要因, 家族看護学研究, 14(1), 58-67
- 久保川真由美, 浦橋久美子, 山岸千恵, 小玉敏江(2010): 高齢者を在宅で介護する未婚介護者
の労働および生活実態と介護問題—A県内の居宅介護支援事業所のケアマネージャー
へのアンケートから, 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 1, 37-44
- 高橋(松鶴)甲枝, 井上範江, 児玉有子(2006): 高齢者夫婦二人暮らしの介護継続の意思を
支える要素と妨げる要素—介護する配偶者の内的心情を中心に, 日本看護科学会
誌, 26(3), 58-66
- 菊池有紀, 葉袋淳子, 島内節(2010): 在宅重度要介護高齢者の排泄介護における家族介護者
の負担に関連する要因, 国際医療福祉大学紀要, 15(2), 13-23
- 樋口キエ子, 丸井英二, 田城孝雄(2007): 重度要介護者の家族介護者が医療処置に慣れる
過程で体験する出来事の意味, 家族看護学研究, 13(1), 29-37
- 片山圭子, 藤川あや, 諸橋理恵子(2015): 医療ニーズのある利用者を介護する主介護者の
介護負担及び在宅介護継続の要因に関する研究, 第45回日本看護学会論文集, 在宅看護
横瀬利枝子(2009): 介護施設利用に至るプロセスへの一考察—認知症の母親と娘の関係性
の視点から—, 生命倫理 19(1), 60-70
- グレッグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江(2007): よくわかる質的研究の進め方・まとめ方看護
研究のエキスパートをめざして, 医歯薬出版株式会社
- 天谷真奈美, 大塚真理子, 島田広美, 星野純子, 青木由美恵(2002): 痴呆性高齢者を介護する
娘介護者の危機, 埼玉県立大学紀要, 4, 87-93
- Maslow AH, 小口忠彦訳(1970): 人間性の心理学(改訂新版), 産能大学出版部東京
- Frank .G.Goble, 小口忠彦訳(1972): マズローの心理学, 産能大学出版部東京
- 坂井郁恵, 水野恵理子(2014): 在宅精神障害者の家族介護者の生活体験から捉える Sense
of coherence に関する記述的研究, 日本看護科学会誌, 34, 280-291

- 坪井章雄, ND パリー (2011): 認知症高齢者を介護する家族の介護負担感軽減に関する
介護保険サービスの検討, 茨城県立医療大学紀要, 16, 13-22
- 橋本力 (2008): 介護支援専門員によるインフォーマル・サポートのアセスメントに関する
文献的研究, 生活科学研究誌, 7, 1-11
- 彦聖美, 鈴木祐恵 (2014): 自宅で家族を介護する者のストレス対処能力の性差にみた特徴,
日本在宅ケア学会誌, 17(2), 45-52
- 荒川博美, 加藤基子, 長島きぬ子 (2012): 認知症サポーター養成講座修了者の活動実態と
活動意欲, 日本認知症ケア学会誌, 11(3) 665-677
- 宮坂啓子, 藤田君枝, 田淵康子 (2014): 認知症高齢者を介護する家族の介護肯定感に関する
研究, 老年看護学, 18(2), 58-66

表1. 対象者の背景

ID	娘介護者の年齢(歳代)	介護期間(年)	訪問看護利用期間(年)	副介護者の有無(続柄)	重度要介護者との同居	就労状況	面接時間(分)
A	40	12	12	有(母)	同居	自営業	50
B	60	8	3	無	同居	無	43
C	60	3	1年未満	有(母)	同居	無	35
D	60	4	1年未満	有(母)	別居	無	35
E	60	6	6	無	同居	パート	43
F	60	5	1	無	同居	無	57
G	60	3	1年未満	無	同居	自営業	44
H	60	5	3	無	同居	無	49
I	50	6	1年未満	無	同居	正規雇用	39
J	60	12	3	無	同居	パート	53
K	50	9	1年未満	無	同居	無	36
L	50	10	1年未満	無	同居	自営業	55

表2. 対象者が介護している重度要介護者の背景

ID	続柄	年齢(歳代)	主要疾患	要介護度	バーセルインデックス(点)	医療的処置	利用している社会資源
A	父	70	筋萎縮性側索硬化症	5	0	呼吸器管理 在宅酸素療法 胃瘻管理 膀胱留置カテーテル管理	訪問看護/毎日 訪問入浴1回/週 訪問診療1回/週 訪問リハビリ2回/週 訪問介護2回/週 レスパイト入院1回/半年
B	母	90	廃用症候群	5	0	リハビリテーション	訪問看護1回/週 訪問診療1回/月
C	父	80	多発性脳梗塞 糖尿病 前立腺がん	4	20	リハビリテーション	訪問看護2回/週 訪問入浴1回/2週
D	父	80	廃用症候群 糖尿病 前立腺肥大症	4	25	血糖測定 間欠的導尿 リハビリテーション	訪問看護2回/週 訪問入浴1回/週 訪問診療2回/月
E	母	80	脳梗塞後遺症 高血圧症 狭心症	4	20	皮膚創傷処置	訪問看護1回/2週 デイサービス1回/週 デイケア3回/週 ショートステイ(不定期)
F	父	90	高血圧症 前立腺肥大症	4	20	膀胱留置カテーテル管理 摘便	訪問看護1回/週 訪問歯科(適宜) デイサービス1回/週 ショートステイ2泊3日/週
G	母	90	心不全	5	0	皮膚創傷ケア 摘便	訪問看護2回/週 介護タクシー1回/月 デイサービス2回/週 ショートステイ1回/月
H	母	90	慢性心不全	5	0	皮膚創傷ケア 摘便 リハビリテーション	訪問看護2回/週 訪問診療1回/月 デイサービス1回/週 ショートステイ1泊2日(必要時)
I	母	80	パーキンソン病	4	10	皮膚創傷ケア リハビリテーション	訪問看護3回/週 訪問介護3回/週 デイサービス3回/週 レスパイト入院(10-14日/月)
J	母	90	廃用症候群 糖尿病	5	0	胃瘻管理 吸引 膀胱留置カテーテル管理 血糖測定 摘便・浣腸	訪問看護1回/週 訪問入浴1回/週 訪問歯科2回/週 訪問介護2回/週 2泊の宅老所/週 デイサービス3回/週
K	母	80	陳旧性脳梗塞	4	25	吸引	訪問看護2回/週 デイサービス3回/週 デイケア2回/週
L	父	90	脳梗塞後遺症	5	0	吸引 胃ろう管理 膀胱留置カテーテル管理	訪問看護5回/週 デイサービス2回/週

表 3. 重度要介護者を介護する娘介護者における在宅介護継続を支える認識

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード
親への愛着	親への愛情	親への好意的感情	親のことが大好きで、その親の子どもでも良かったと思う 親が愛おしく、かわいいと思う
		親を大切に思う気持ち	親は特別で大切だと思う 親を一人にはしたくないと思う 親を守りたいと思う 出来ることなら、全部、私が見てあげたいと思う
	親への感謝	親としての存在や役割への有り難さ	居てくれるだけで親の存在があり、親としての役割がある 親がいて私がいる、親のおかげだと思う 親と繋がっていたいと思う
		親への恩返し	今までお世話になったことを恩返ししていく 子として、親から育てて貰った恩義がある。
	家族の絆	親を中心とした一体感	親を中心に人との繋がりがあがると思う 介護を通して共に過ごす時間を持つことができた 家族の絆、結束ができる
		娘の介護が一番と思う考え	娘家族と暮らすことが一番うまくいくと思う “あうん”の呼吸で介護ができる、これは嫁でも息子でも出来ない娘だから出来ると思う 私の介護のやり方が親には一番楽だと思う
		親と過ごす安心感	親が居ることで私が安心して安定している 私が介護することで親の状態がよく分かり、安心していられる 私が居ることで親が穏やかに安心していられる 私が介護することで親の状態が安定している
	親の介護をやり遂げたい 看取りへの思い	親の意思を尊重する 看取りへの思い	“自分は家で死にたい”という親の意思を尊重していると思う 住み慣れた家で生を全うすることが、一番、良いことだと思う 父の最期に納得がいかなかったから、 母は最後まで後悔のないように、私が介護をやり遂げたいと思う 人生の中で、親が最期を迎えるとして、側に居て、手助けしたいと思う 親がこれ以上は元気にはならない、でも、そこを維持したいと思う
		娘として後悔のない 看取りへの思い	優しい言葉やありがとうの言葉に喜びを感じる 感謝の言葉にうれしくてまた頑張ろうという気持ちになる 委ねられて、必要とされることに喜びを感じる
	他者からの承認 に対する喜び	親に承認されることでの喜び	近所の人からの親の介護に対する労いの言葉に喜びを感じる 訪問看護師さんから親の介護を褒めてもらったことがとてもうれしかった 頑張っている自分を認めてもらったことがとてもうれしかった 私がこれだけ頑張っていることを(世間に)もっと認めて貰いたいと思う
社会からの承認に対する喜び		訪問看護師さんが24時間体制でいつでも来てくれることが一番、安心である 先生には聞けないことも看護師さんだと相談できて助かり、安心できる 何か困り事があった時に、ケアマネさんの提案がとても助かり安心できる レスパイト入院やデイサービス・ショートステイはとても助かり安心できる	
介護状況への 満足感	社会的支援による安心感	訪問看護支援による安心感	訪問看護師さんが24時間体制でいつでも来てくれることが一番、安心である 先生には聞けないことも看護師さんだと相談できて助かり、安心できる
		介護サービスによる安心感	何か困り事があった時に、ケアマネさんの提案がとても助かり安心できる レスパイト入院やデイサービス・ショートステイはとても助かり安心できる
	親の介護を通して 得られる充実感	親の介護から得られる喜び	親の喜ぶ顔や笑顔を見ると介護を頑張ってきて良かったと思う 親の介護から共に喜びや満足を感じ、共に過ごせる喜びがある
		親の介護から得られる楽しみ	共に笑うことや返事が返ってくる楽しみがある 温泉に出かけたり、共に何かをする楽しみがある
	親の介護は 自らの生きる支え	介護と仕事を 続けていく上での励み	介護と仕事のバランスを考えて自分らしくいたいと思う 仕事があることで頭の切り替えや生活にメリハリができ、親の介護を頑張れる 親の介護をすることで自分の生きる意味がある
		親の介護は自らの生きる意味	自分が救われて助けられている 親がいなくなったら、私は寂しくて、どうしていけないのかと思う
		親の介護は自らの生きがい	親の介護が生きて行く上で人生の支えとなっている 親の介護が生きがいとなっている
親の介護による拘束感	親の存在は生きる希望	病気になったにしても、親には回復して欲しいという希望がある 親に対して、期待をしている娘がいて、いつまでも居て欲しい親は私の希望だと思う	
	親の介護をせざるを得ないという考え	親だからしょうがない、介護するしかないです 自分しかいない、必然的にせざるおえない 母はあまり好きじゃないけど、親だからしょうがないもんね	
	世間体を守る考え	“娘を見て貰って一番、良かね”と言われて、娘の介護が一番良いという世間の目がある 娘としての世間体を守らなければならないこと	
	社会資源を 利用することへの罪悪感	親を預けることにいつもかわいそうだと思う 親が行きたがらないのに、自分が楽しんでいるようで、預けることを不憫だと思う	
親の介護役割に 伴う使命感	親の介護のありのままを受け入れざるを得ない思い	親のありのままを受け入れようと思う 無理をせず出来ることをすればいいと思う 何が大事なのかを決めたら、他のことは適当に割り切って介護することも大切だと思う “大変な事を乗り越えてきたんだから何とかかなるさ”と思う考えが出来たらいいと思う 今を受け入れて楽に生きる考えができればいいと思う	
	現状を受け入れる思い	母が祖母を長い間、家で見ていたことから、自分も看ようと思った 友人達が自分の親を見ていたことから、自分もやれないことはないと思って始めた 親の介護は何の違和感もなく、あたり前だと思う	
娘としての 介護役割の自覚	親の介護はあたり前	親の介護は自然なこと、自然な成り行きで引き受けている 自分が生きていく中で、親の介護は生活の一部であり、日常の中での仕事となっている	
	私しかいない 親の介護への責務	親の介護は私の責任だと思う 私しかいない、親の介護は私の努めだと思う 私はいつも親に関心を払い必要な世話をして自分の責任を果たしていると思う	